

## コリント人への手紙第一5章 「罪を許してはいけない」

### 1A 教会の中の罪 1-5

#### 1B 淫らな行い 1-2

#### 2B 霊における裁き 3-5

### 2A 全体に広がる罪 6-8

### 3A 内部の裁き 9-13

## 本文

コリント人への手紙第一5章を開いてください。私たちは今朝、一節ずつ5章全体を見ていきたいと思えます。これまで私たちは、コリントにある、派閥争いという問題をパウロが取り組んできたところを見ました。派閥争いと言ったら世に常にあるものですが、それが教会で起こっているというのは、とても衝撃的です。

そして次の問題は、淫らな行いです。5章から7章にかけて、パウロは、性的な問題について取り組んでいます。聖書では、男が女と結ばれる結婚において、その性行為が神に祝福されて、その結実が子どもであるとあります。それ以外の性行為はみな、淫らな行いです。これもまた、世においては常にある問題ですね。だから驚くには値しませんが、けれども、それが教会の中にあるとなると大きな問題です。しかし聖書は、イスラエルの民の中にも、また教会の中にも、神の民の間に淫行があるという現実を、克明に記しています。それだけ、人が肉なる者であり、性的な誘惑にはとても弱いことを表していて、決して他人事にできない切実な課題です。

一般社会では、両者の合意があれば、どんな形の性関係も構わないとしますね。姦淫、すなわち不倫は倫理的には悪いものとされますが、離婚や民事には問えても刑事には至りません。婚前交渉であれば、なおさらです。結婚までセックスは待とうとか言うものなら、かえって古い価値観を押し付けているとして批判されかねません。そして、男女の性関係だけでなく、今は同性愛の関係も許容されていますね。ギリシア・ローマ社会では、今の日本よりも、もっと、おおっぴろげに性関係について許容されていました。ギリシア人にとって、男は三人の女がいました。一人は法的に相続する長男を生むための妻。もう一人は妾です。さらにもう一人は、性的快楽を楽しむ売春婦がいました。そして、同性愛は異性愛よりも、もっと高尚なものであるとさえされていました。

こういった中に教会が建て上げられていましたが、コリントにある教会は、こうしたことに寛容であることがすぐれていると思っていたのです。これが大きな問題で、パウロが5章で取り組んでいる内容です。いかに自分たちの心が広く、寛容であるかを彼らは誇っていたのですが、果たして、それが寛容ということなのでしょう。私たちは、神の聖さと正しさを無視して、互いに愛し合うこ

とはできるのでしょうか？義のない愛は、成り立ちません。義と憐れみは相対するものではなく、一対のものです。

## **1A 教会の中の罪 1-5**

### **1B 淫らな行い 1-2**

<sup>1</sup> 現に聞くとところによれば、あなたがたの間には淫らな行いがあり、しかもそれは、異邦人にもないほどの淫らな行いで、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。

パウロは、驚きをもってこの文を書いていることでしょう。「現に聞くとところによれば」と言って、この話がかなり広範囲に広がっていることを話しています。「あなたがたの間には淫らな行い」と言っていて、本人が淫らな行いをしているということは問題ですが、それをそのまま許容していること自体を問題にしています。

そして、これは「異邦人にもないほどの淫らな行い」と言っています。実はローマ法で刑法に触れる行いだったのです。「父の妻を妻にしている」つまり近親相姦です。「父の妻」と言っていますから、血のつながっている母ではなく、継母のことです。いずれにしても、ローマ法では厳罰になる対象でした。ローマは、反逆罪、殺人や強奪、貨幣の偽造など、刑事の問題としていましたが、近親相姦もその一つでした。島流し、財産の没収、市民権の剥奪などの厳罰が科せられます。そして神の律法では、忌まわしい行いとして死罪に値すると宣言されているものです。「レビ 18:8 あなたの父の妻の裸をあらわにしてはならない。それは、あなたの父の裸をあらわにすることである。」とあります。

<sup>2</sup> それなのに、あなたがたは思い上がっています。むしろ、悲しんで、そのような行いをしている者を、自分たちの中から取り除くべきではなかったのですか。

パウロは、4章で問題にしていた問題をここでも取り上げています。「思い上がっています」ということです。4章6節で、「それは私たちの例から、「書かれていることを越えない」ことをあなたがたが学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して思い上がることをないようにするためです。」と言っていました。書かれていることとは、聖書に書かれていることです。神が語られておられることを越えて、それが高尚なことだ、霊的なことだと考えるのは、思い上がりです。6章でパウロは、コリントの人たちが考えていることを取り上げています。「すべてのことが私には許されている。(12節)」という考えを持っていたようです。おそらくは、キリストにあって私たちは自由になっている、だから律法にも、国の法律にも縛られない、自由な生き方ができるのだとでも考えていたのでしょう。この考えの過ちについては、6章で詳しく見ていきたいと思いますが、聖書に書かれていることを越えて考えていることは、思い上がりなのです。

しばしば、教会において、指導する人たちが、厳しい対処をしなければいけない時があります。例えば、教会の若い女の子が、未信者の男の子と関係を持って、何度となく注意したけれどもその関係を断ち切らないでいるために、厳しい対処をしました。教会の交わりには入って来てきていけない、礼拝を献げてはいけない、聖餐にあずかってもいけないと決めます。そうすると、そんなことは酷いではないか！なんという偏狭な決断なのだ、と責め立てる声は必ず出てきます。

けれども、神から見れば、明らかに罪であるとするを教会の中に許容することが、果たして愛でしょうか？ローマ 12 章 9 節には、「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい。」とあります。悪を憎むこと、善から離れないことがあってこそ、真実な愛と呼ぶことができるのです。もし悪を許容しているならば、それは偽りの愛だということです。

愛を強調して、何でも受け入れようとする人は、必ず、「イエスは愛で満ちていた。罪だ、罪だという人は、パリサイ派のようだ。」と言います。けれども、パリサイ派の問題をイエス様は「偽善者」と言われたのです。本当はそうでないのに、表向きは神を敬っているようにしている彼らを偽りであると呼ばれたのです。イエス様は、行為どころか、心の中で情欲を抱いたらすでに姦淫を犯しているとされたのです。その行為そのものを受け入れるというのは、イエス様の眼中にはないのです。姦淫の現場で捕らえられた女について、連れてきた者たちに、「罪のない者が石を投げなさい」と言われたのですが、彼女が石打を受けるべき罪人であるとみなしておられたのです。その彼女を、わたしも罪に定めないとして憐れみをかけ、最終的な罪の処罰はご自身が十字架で受けられたというのが、神の憐れみなのです。

私たち教会がすべきことを、パウロはこう述べています。「むしろ、悲しんで、そのような行いをしている者を、自分たちの中から取り除くべきではなかったのですか。」一つは、悲しみます。罪に対して悲しみます。その愛する兄弟と呼ばれている者が、全く悔い改めずに、父の妻を妻にしているということ自体に、その悪に対して悲しみます。愛しているからこそ、罪を悔い改めていないことに心の痛み、悲しみを覚えるのです。次に、「自分たちの中から取り除くべき」ということです。礼拝のため集うことを禁じる。聖餐や食事にもあずからせない。付き合わない、ということです。

## 2B 霊における裁き 3-5

<sup>3</sup> 私は、からだは離れていても霊においてはそこにて、実際にそこにいる者のように、そのような行いをした者をすでにさばきました。

パウロは、コリントの人たちの中に、彼が自分たちのところに来ることはないと考えて、思い上がっている人々がいるとして、神の国は力にあり、私はみこころならば、すぐにでもあなたがたのところに行くことができる、そして、むちを持っていかなければいけないのですかと問うていました。(4:18-21)。実は、パウロには使徒の權威が与えられていて、体が離れていても、霊において教

会においての重要な決断に関わることができたのです。教会から彼を取り除くという決定を、教会の代表者として彼が遠くにいながら行いました。

<sup>4</sup> すなわち、あなたがたと、私の霊が、私たちの主イエスの名によって、しかも私たちの主イエスの御力とともに集まり、<sup>5</sup> そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。

「サタンに引き渡した」という決定をしています。パウロは、テモテへの第一の手紙においても、神を冒瀆していたヒメナイとアレクサンドロについて、「彼らをサタンに引き渡しました。(1:20)」と言いました。ここで彼は、主イエスの名によって、つまりイエスの権威によって、御力とともにとも言っていますが、教会として集まっているところには、神の守りの力があるということです。そこから外されるということは、サタンの影響力の中に陥ることになります。それを、「サタンに引き渡した」という言葉で言い表しているのです。

私たちは、空気のように当たり前になっている恵みがあります。神によって、また神に仕える御使いたちによって守られているという恵みです。ヤコブが故郷に戻る旅をしている時に、これから兄エサウに会わないといけない時に、神の使いたちが現れて、ヤコブは、「これは神の陣営だ」と言いました(創世 32:1-2)。マハナイムと呼びました。神はご自分の愛する、選ばれた者たちを災いから守ってくださっています。

しかし、執拗に罪を犯し続け、悔い改めることのない者には、神の裁きとして、悪しき霊がその人を悩ませるままにしておかれることがあります。サウルがダビデを殺そうと意図し始めた時に、「聖書協会共同訳 I サム 18:10 神からの悪い霊がサウルに激しく下り、彼は家の中でわめき叫んだ。」とあります。サウルが、主にいつまでも背き続け、その御声に従わず、主の御名によって戦っているダビデを妬み、殺そうとまで思っているのです、彼が悪い霊に悩まされるままにされたのです。

私たち信じる者たちが、イエスの御名によって集まる所には、神の力があります。私たちが当たり前に思ってしまうけれども、そこには、あらゆる悪しき力や悪しき霊が触れることのできない力で守られています。12章に行きますと、教会は「キリストのからだ」であり、御霊によって御体の一部になるようにバプテスマを受けた、とあります。ですから、一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜びます(12:26)。そこから取り除かれるということによって、自分の犯している罪の結果を、もろ受けることになるのです。

その目的は、「その肉が滅ぼされるように」ということです。その肉が滅ぼされるというのは、どういことでしょうか？これは、彼の肉体における生活が、ぼろぼろになる、ということでしょう。私には、とても若い時の、このことを学んだ思い出があります。就職して間もない時です。教会の祈り

会にも参加したくて、職場から遠かったけれども、行ける時には行きました。教会の人のご家庭での祈り会です。そこで昼食の時のお弁当箱を置き忘れました。次回行った時に、洗って返してくださいました。けれども、再び忘れました。次にお受け取りした時は、そのままだったんです。わずかに残っている食べ残しが腐臭を放っていたのはいうまでもありません。それから、私は弁当箱を忘れることはなくなりました。おそらく、その方は牧師からアドバイスを受けたのだと思います。

その腐った食べ残しのように、自分で自分の罪が分かるようにならないと、その罪から離れられないということがあります。罪の中に陥っている兄弟がいて、その中で苦しんでいるのを助けてしまうと、かえってその罪を繰り返してしまうことがあります。ここで愛しているというのは、どういふことなのか？を考える必要があるんですね。時に厳しくしないといけない、つまり、自分で自分の罪が分かるように、そのままにする、手助けしない、関わらないということも、その人が真実に立ち直るための愛なのだということがあるのです。

そこで、「彼の霊が主の日に救われるため」とあります。主の日とは、イエス様が再び教会のために戻って来られる日のことです。もし、この近親相姦の罪を悔い改めないままでしたらどうなるのか？次の6章でパウロが、こう言っています。「6:9-10 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そして、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。」つまり、主の日に救われないということです。神の国に入れないのです。

イエス様が、情欲を抱いて女を見る者は、右の目を抉り出して捨てなさい、「マタ 5:29 からだ一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれるほうがよいのです。」と言われました。これは優先順位を表しているんですね、霊の救いを得るためには、肉体において損傷が出たとしてもそうしなさいということです。五体満足で罪の生活をして、死んで滅んでしまう者に対して、神は時に、その人に肉体における事故や怪我をもお許しになられて、彼がご自身に立ち返るようにされることもあるのです。コリントの教会では、この近親相姦を犯している兄弟が、何とかして立ち直るために救われるために、ひと時の悲しみを通らせるという厳しい処置を施さないといけなかったのです。11章32節において、こう言いました。「私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともにさばきを下されることのないように、主によって懲らしめられる、ということなのです。」

## **2A 全体に広がる罪 6-8**

<sup>6</sup> あなたがたが誇っているのは、良くないことです。わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。

すべてのことは許される、などと言って誇っているのは、良くないことだとパウロは言っていま

す。そして、聖書によく出てくる言葉、「パン種」を使って、それがいかに良くないことかを話していきます。コリントの町は、国際的で、何でもかんでも受け入れ、寛容である、文化的に多様なところと言われてきました。伝統的、保守的なところでは罰せられるものが、何をやっても他の人は干渉しない、そのまま受け入れるという空気があったようです。そこにおいては、一人ひとりの生活が許容されていました、個人主義的でした。性的な罪は、その本人だけの問題とされがちです。盗みであれば被害が明らかですが、強姦のようなものでない限り、両者の合意であればその二人だけのこととされがちです。しかし、神の家族や教会は違います。

イエス様は、「ルカ 12:1 パリサイ派のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。」と言われました。彼らの偽善というものが、いつの間にか人々の間に浸透して行って、今が偽りの行動を取るようになってしまう。だから、気を付けなさいということです。ガラテヤ書 2 章で、ペテロがアンティオキアの教会で、異邦人と一緒に食事をしていたのに、エルサレムからの割礼派と呼ばれる人々がやって来るので、身を引いてしまったことに抗議したと言っています。ペテロがそうした行動を取ったので、いつの間にか他のユダヤ人たちも、バルナバまでもが、その偽りの行動に引き込まれてしまった、とあります。

パン種は、イースト菌によってできていますね。パンをふくらませるための、種になるイーストのことです。これを、粉をこねた生地に入れて、全体にふくれるようにします。そして、全体にふくれたら、ごく一部は残しておき、それから焼きます。その残した一部は次のパン作りのための、パン種になるのです。我が家では、ヨーグルトの種菌でこのことを経験しています。ほぼ毎日、ヨーグルトを食べていますが、数か月は平気で、同じオリジナルの種菌を使うことができます。

このように、初めはわずかな罪や不正であっても、それが全体に広がっていくという姿を「パン種」として、聖書は表しているのです。その典型的な出来事は、アカンAcanaの罪です。イスラエルの軍隊が、エリコの町を、主の御名によって攻略することができた時に、そこにあるものはすべて、聖絶されるものだから、手を出さずと命じられていました。金銀、鉄や青銅の器も、主の聖所に献げられるものであり、自分の分捕り物としてはいけません。ところが、アカンがその一部を貪って、自分の天幕に隠しました。美しい外套と、銀や銀です。

イスラエルは、そのことを知らずにいました。次の攻略する町はアイです。アイを偵察に行かせたところ、「全軍を連れていく必要はない、二、三千人ぐらいを上らせていけばいいでしょう。」との報告がありました。けれども、よく考えてください。エリコの攻略は、彼らの兵力によったのでしょうか？違いますね、主の御名によって倒したのです。ときの声を挙げたら、城壁が崩れ落ちたのです。そして、三千人が昇って行ったら、彼らはことごとく負けてしまいました。そして、民の心は萎えてしまいました。

ヨシュアは、衣を引き裂いて、主の前で嘆きました。「なぜ、あなたはここまで連れてきたのですか？ここでアモリ人によって滅ぼされるためですか？」と。彼の嘆きを主は、完全に無視されました。「ヨシ 7:10 立て。なぜ、あなたはひれ伏しているのか。」と。全く意味のない、無関係なことでヨシュアは嘆いていたのです。彼は、いつの間にかイスラエルの仲間が自分も含めて、靈的に鈍っていたことに気づいていなかったのです。主は続けて言われます。「イスラエルは罪ある者となった。」ということです(11 節)。それからアカンの罪を明かされますが、それが全体に広がって、イスラエル全体の罪となっていたのです。そこで、最終的にはアカンを石打で死刑にして、それから、主に伺いを立てて、アイを無事に攻略することになりました。これが、「わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませる」ということです。

私たちは、人間的に言うと、「たかが他人の罪、されど自分の罪」ともで言いましょか、教会における罪は他人事にできないのです。先ほど挙げた、若い女の子が未信者の男の子と関係を持っていることを知っていて、それをそのままにしておくとしませう。そうすれば、いつの間にか礼拝が靈的によどみ、祈りが聞かれるという感触もなくなり、力がなくなっていくことに気づきます。喜びや感謝もどこかにいっていでしょ。他の罪もそのままにされて、互いに傷付けていくことも起ころでしょ。その人の罪だけで終わらなくなるのです。

なぜなら、私たち神の家は、聖なる神が私たちの間に住んでおられるからです。神は、罪をそのままにしておかれないのです。アナニアと妻のサツピラのことを思い出してください。人々が、自分の財産を売って、その代金を使徒たちのところに持っていきました。しかしアナニアとサツピラは、土地を売ったのですが、その代金の一部は取っておき、これがすべてであるように偽ったのです。すべての代金を持ってこなかったということが問題ではなく、これがすべてであるとして、偽ったことです。偽善ですね。それで、アナニアとサツピラはその場で息絶えて死んでしまいました。これは、恐れ震えるようなことですが、教会が偽善のパン種から守られるためだったのです。この出来事の後、数々の力強いわざが、使徒たちを通して行われて行きました。病人が大通りで並んで寝かされて、せめてペテロの通りかかる時に、その影だけでも、かかるようにするほどだったのです。このような力は、聖なる神が教会に住んでおられるからであり、偽善はそれゆえ排除されなければいけませんでした。

私たちも、教会に神の息があるように、聖さを保っていないといけません。主にある喜びや平安、愛が留まっているように。御霊の賜物が力強く用いられるように。

<sup>7</sup> 新しいこねた粉のままでいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなのですから。私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。

パン種について、イスラエルには、彼らがエジプトから神によって救い出されたことを記念する、

とても大切な祭りがありました。過越の祭りとそれに続く、種なしパンの祝いです。出エジプト記 12-13 章に書かれています。イスラエルがエジプトを出て行く前夜、主は、それぞれの家庭で、子羊をほふるように命じられました。そして流された血を取っておき、それを門柱と鴨居につけるように言われました。そして、子羊は火で焼いて、みなでいっしょに食べます。種なしパンと苦菜といっしょに食べます。その夜には、御使いがやってきます。そして、動物であれ、子どもであれ、すべて最初に生まれた男の子を殺すさばきを行ないます。しかし、家の門に血が塗られているのを見たときには、その家は通り越します、という約束をされました。ですから、過越というのは、神の裁きが通り越すことを意味します。

このときから過越の祭りという祝いが始まりました。イスラエルは、毎年、過越の祭りを守っていました。そして、約二千年前、イエス様は、過越の祭りの日において十字架につけられ、血を流し、死なれました。そこでパウロは、「**過越の子羊キリスト**」と呼んでいます。イスラエルの家の門に、ほふられた子羊の血を見た御使いが、さばきを行なうのをやめたように、イエスが十字架上で流された血を見ることによって、神は私たちに対する裁きを過ぎ越されます。

そして、過越の祭りの、次の日から、種なしのパンの祝いが七日間続きます。イスラエルの家は、自分の家にあるパン種をくまなく探して、それを取り除きます。そして、その七日間は、パン種が入っていないパンを食べるのです。七は神の数字、完全数を表しています。過越の次にパン種が一切ないというのは、イエス様が流された血によって、罪が一切取り除かれたことを意味します。神が、みなさんの罪を、キリストの血によってすべてを取り除いてくださいました。少しでも残しておられません。ですから、パン種があってはならないのです。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」

<sup>8</sup>ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。

キリストにあって新しくされたのに、相変わらず、信じる前の古い行いをしているのであれば、それはよくない、ということを話しています。「**悪意と邪悪のパン種**」とありますが、彼らは近親相姦の罪をそのままにしていただけでなく、次の 6 章を見ますと、不正な行いがあったようです。そしてなんと、それを教会の中で対処するのではなく、信者が他の信者を世の裁判所で訴えているという始末だったのです。結局、彼らは裁かないで寛容で、と言いながら、外部の裁判所にも安易に訴えていたという矛盾に陥っていました。彼らは、悲しみをもって、愛をもって罪を犯した者を主に立ち直すのではなく、こうやって悪意をもって人からだまし取ったり、裁判所で訴えていたりしたのです。



それでパウロは、「誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか」と言っています。ところで、おそらく、当時のコリントにある教会は、ユダヤ人たちの祭りを、そのまま、主の聖餐の時に取り入れていたようです。過越の祭りや種なしパンの祝いを、主イエスの死を覚えて行っていたような感じがします。元々、過越の食事において、イエス様はこれを行いなさいと言われていたのだから、何らおかしいものではありません。私たちこそが、簡略化して、パンとぶどう酒の場面のみを行っています。ユダヤ人でイエス様をメシアと信じている人々の集まり、メシアニックと呼ばれますが、彼らは、過越の祭りの時はイエス様の死を覚えて、その食事にあずかっています。

### **3A 内部の裁き 9-13**

<sup>9</sup> 私は前の手紙で、淫らな行いをする者たちと付き合わないようにと書きました。

以前もお話したように、第一の手紙は、実は初めての手紙ではありませんでした。パウロとコリントの人たちは、二通の手紙ではなく、もっと多くの手紙を交わしていたと思われます。第一の手紙の前の手紙で、「淫らな行いをする者たちと付き合わないようにと」言っていました。けれども、ちょっと誤解があったようです。

<sup>10</sup> それは、この世の淫らな者、貪欲な者、奪い取る者、偶像を拝む者と、いっさい付き合わないよという意味ではありません。そうだとしたら、この世から出て行かなければならないでしょう。

これは、信仰生活における常識と言ったらよいでしょう。「この世の淫らな者、貪欲な者、奪い取る者、偶像を拝む者」といえば、もちろん、この世においては常であります。こうした人々と付き合うな、ということであれば、パウロがここで言っているように、「この世から出て行かなければならない」であります。これは、イエス様が弟子たちのために祈られたことです。「ヨハ 17:15 わたしがお願ひすることは、あなたが彼らをこの世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。」私たちは、イエス様がそうであられたように、この世において神を、そしてキリストを証しするために立てられているのであり、人々の間に住むことを、イエス様がそうであられたように、神から願われているのです。

例えば、自分の隣で働いている同僚が、たとえ同棲中で、結婚していないのにそういう関係の中にいることを知っていたとしても、まだ神を知らないから、キリストを知らないからそうなっているのであって、その罪を糾弾したり、その人から離れるわけではありません。むしろ、ダニエルがネブカドネツアルに対して接したように、寄り添って、いつか彼が神を知ることができるように祈り、説明を求められたらキリストについて話すのです。

<sup>11</sup> 私が今書いたのは、兄弟と呼ばれる者で、淫らな者、貪欲な者、偶像を拝む者、人をそしめる者、酒におぼれる者、奪い取る者がいたなら、そのような者とは付き合っはいけない、一緒に食事を

してもいけない、ということです。

ここで、私たちは、主にあつてあらゆる人が来ることを受け入れていきます。教会は、罪人が集まるところであり、イエス様は一人ひとりを悔い改めに導かれます。けれども、導かれたと言われている者に、以前と変わらぬ生活、世から救い出されたはずなのに、以前として世と交わりを持っている者がいたら、聖なる神がおられる仲間としての付き合いはやめる、ということでもあります。

「一緒に食事をしてはいけない」とあります。食事を共にするということは、一つのものがそれぞれの腹に入るということ、つまり、一つになることを意味します。少なくともそれが当時の考え方、また中東の人々の考え方です。「同じ釜の飯をいっしょにする」というのと同じ考えです。共に食べることは、とって大切な行為です。コロナ禍で、私たちは気を付けなければいけませんが、それでも、距離を取りながら自分の弁当を食べているのは、そのためです。やってみてください、ご飯を食べながら、一緒に食べている相手と喧嘩をしてみてください。食べ物が喉を通らなくなりますね。既にある胃にある食べ物で、お腹が痛くなるかもしれません。それは、一緒に食べる時に、互いに平和があることを意味しています。平和のうちに一つになっているからです。

ですから、罪を犯し続けて悔い改めていない者は、そうした交わりに入ることができません。共に聖餐にあずかれないことが第一に、共に礼拝で賛美を献げてもしけません。そもそも、罪を自覚していたら、自分自身が、それができなくなるはずで、箴言で、遊女、売春婦に通じている男がこう嘆いている姿があります。「5:14 私は、集会、会衆のただ中にあつても、ほとんど最悪の状況であった」と。その惨めな姿に気づいていない人は、こちらから追い出さないとはいけません。

<sup>12</sup> 外部の人たちをさばくことは、私がすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。<sup>13</sup> 外部の人たちは神がおさばきになります。「あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」

しばしばキリスト者で誤っていることは、外部の人々を裁くことです。こんな悪いことをしていると、いって憤慨するのですが、ちょっと待ってください、私たちがイエス様を知る前には同じこと、いやもっと悪いことをしていたではないですか！必要なのは、イエス様ご自身で、死なれるほどに愛してくださいということなのです。そして、外部の人たちは、その外部の裁きの基準があります。ローマにおいて、その法に従って裁かれることです。私たちが、キリストの律法にしたがって外部の人々を裁く過ちを犯してはいけません。

そうではなく、内部にいる人々で、キリストの命じられていることに、ことさらに背いている者がいるならば、取り除く必要があるということです。イエス様は、その手順を弟子たちに語られていました。「マタ 18:15-17 また、もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけの

ところで指摘しなさい。その人があなたの言うことを聞き入れるなら、あなたは自分の兄弟を得たこととなります。16 もし聞き入れないなら、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。二人または三人の証人の証言によって、すべてのことが立証されるようにするためです。17 それでもなお、言うことを聞き入れないなら、教会に伝えなさい。教会の言うことさえも聞き入れないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」

罪を犯しているのが分かったら、その本人のところに行き、指摘します。それでも罅が明かないなら、証人を連れて行きます。これはとても大事ですね、噂や根拠なしに罪を責めてはいけなからです。そしてそれでも聞き入れない時は、教会に伝えます。そして教会のことを聞き入れないのなら、異邦人が取税人のようにしなさいとイエス様は言われます。ユダヤ人の中では、自分たちの家、仲間から外れている存在ですが、そのようにしなさいと言われます。

ここで分かることは、このようにするのはあくまでも、「あなたは自分の兄弟を得たこととなります」というように、その兄弟が立ち直ることなのです。教会から追い出すことは、一般的には破門なんと言う言葉が使われますが、キリスト教の世界では「教会戒規」と呼ばれます。戒める規則です。これは、その人を憎んでいるのではなく、むしろ悲しみをもってそれを行い、その人が罪から神に立ち返ることを願うことなのです。目的は追い出すことではなく、真実に神に戻り、教会にも戻ることができるようにするためです。

この近親相姦を犯している男は、立ち直りました！コリント人への第二の手紙に、彼が自分のしていることに気づき、その罪の責めに押しつぶされそうになっていたのを、彼を赦し、受け入れなさいというパウロの勧めを読むことができます（Ⅱコリ 2:7）。

どうか、私たちの教会も、いつもイエス様がおられる交わりでありますように。キリストの愛に満たされて、罪に対しては憎み、そして罪を犯している人については悲しみ、一人ひとりが主の日に救われることを願って、互いに励まし合っていくことができますように。